

OSFだより

第106号 2011(H23)年2月



発行・編集 財団法人岡本国際奨学交流財団 263-0023 千葉市稲毛区緑町1丁目19番11号 TEL043-248-8808 FAX043-238-4138
osf-midori1911@coda.ocn.ne.jp http://www.osf-family.com
OSF(Okamoto Scholarship Foundation)の活動案内 1、留学生宿舍の運営 2、留学生へ奨学金の支給 3、留学生の学習&人生相談・国際交流

歴史を変える言葉

会長 岡本 正

動物界において人間の特色の第一は、言葉と文字を持っていることだ。「沈黙は金なり」と考える人もいるが、それは間違っている。国連でも常時全世界の国家、民族の代表が集まって話し合いをもっている。それがなければ世界は大混乱するだろう。

何千年来の人類の歴史において、長く歴史に残る言葉に触れてみたい。

第一はアメリカの大統領リンカーンの「人民による、人民の、人民のための政治」である。世界の子どもたちが教科書でこの言葉を学んでいる。これは南北戦争の最中に行った3分間の演説の中の一語だ。民主主義の基本である。

リンカーンの言葉でもう一つ有名な話がある。戦争中一人の婦人がリンカーンを訪問した。大統領は婦人に会うなりこう発言した。「あなたですか？この戦争を起こしたのは！」

婦人の名はストウ夫人。かの有名な小説「アンクル・トムの小屋」の作者だ。当時はアフリカの黒人は人間として認知されてはおらず、単なる動物として牛馬と同様の取り扱いを受けていた。アフリカの西海岸で奴隷商人に捕獲され、奴隷船に乗せられてアメリカのミシシッピ川の河口、ニューオーリンズのまちに運ばれてきた。

この奴隷市場(今でも観光地として現存し、私も一度行ったことがある)でセリにかけられ、アメリカ各地の農場へ売られて行った。奴隷制度は4千年の昔から存在していた人類の恥部だった。この黒人奴隷の一人、アンクル・トムの一生を小説にし、彼がいかに誠実で立派な人間として一生を送ったかの物語だ。これが世界の超ベストセラーになり、奴隷制度は悪であることを世界中が認め、その廃止が一挙に大きな潮流となった。

これを基にして、リンカーンが奴隷解放を宣言し、南北戦争が起きた。

一人の言葉、一冊の書物によって世界が動き、歴史が変わる。

更に一言。1865年南北戦争が終わり数十年がたった時、一冊の大ベストセラーの本が登場する。「風と共に去りぬ」である。南部の中心都市、アトランタに住む一人の家庭婦人の書いた小説で、世界の文学史に残る作品。続いて映画にもなる。南北戦争を一人の女性の目から見た内容だ。映画史上まれにみる大作で、アジアでは最初に上海で上映された。日本では更に十年後、大戦が終わってから上映。私は今までに十回以上も見て、その都度大きな感銘を覚えていた。もし、まだ見ていない人がいたら、ぜひとも見て下さい。

次にマイナス(悪)の言葉・書物の話をしよう。最悪の書は「マインカンプ(わが闘争)」だ。これはナチスドイツのリーダー、ヒトラーの書。要約すると、白人、特にドイツ人は最も優秀な人種であり、一番劣っているのはユダヤ人で、地球上から消すべきだと主張する。

この書により、600万人ものユダヤ人が組織的に殺され、第二次大戦へと進んだのだ。この戦いで更に500万人以上が被害にあった。

言論出版の自由は基本的人権の中で最も重要なものの一つだ。「これだけでなくは駄目だ」と、一切の妥協と論争を許さない固定概念は文化の敵だ。

日本にも戦争中は天皇制絶対主義があって、天皇は神、日本は神国と信じられていた。これによってテロもたびたび実行された。一部の軍人や学者のでっちあげの迷論が日本を支配した。私の高校の同級生M君が東大の国史学科を受験し、某教授の口頭質問を受けた時の話。

問「君の崇拜する人はだれか？」
答「福沢諭吉(慶応大学の創設者)です」
教授、大声で怒鳴る。「君は何故福沢ごとき国賊を崇拜するのか!!」

これは私が友人から直接に聞いた真実の話だ。日本の天皇制絶対主義時代のばかげた話だ。こういう時代を再び起こしてはならない。

楊 洋 (奨学生) 中国 (江西省)
千葉大学 工学研究科 デザイン科学専攻

日本に来て一番感動したこと



私は08年に来日しました。日本に対する最初の印象は自然環境が素晴らしいということです。空気がとても新鮮で、町を歩くと、至る所で緑が目につきます。また、晴雨に関係なく、一週間以上はいていた靴も汚れたりはしません。このようなことは私の母国中国では全く考えられないことです。

私の出身地は中国の南部にある生産工場都市、江西省です。冬には、町が氷結期になって、透明な氷に覆われとてもきれいですが、秋になると景色が一変します。晴天の時には、ほこりが立ち、風が吹くとほこりが風に混じって完全な砂の世界になってしまいます。ですから、日本の環境の良さは私に強い印象を与え、初めて日本の友達に「日本はどうですか」と聞かれた時にも、私はすぐ、「日本人は自分の環境をととても大切にしていますね」と答えました。

しかし、来日前は違う印象をもっていました。私は、来日前に新聞などで日本のイタイタイ病や水俣病に関する記事をよく見ていました。日本に公害病が多いという私の認識と自分の目で見た現実との間のギャップから疑問が生じました。先生や友人たちに聞いてみると、確かに以前の日本は、大気汚染がひどく公害病などが多かったということです。しかし、ここ二十年余りの間に、日本人の環境保護意識が高まるにつれて、環境は大きく改善されました。人類の歴史からみれば、経済発展と環境保護は、従来対立しがちですが、日本

は世界第二位の経済大国になったと同時に、環境問題にも積極的に取り組んでいて、そのような意識がとても貴重だと思います。

ご周知のように、中国は改革開放(1970年~)以来、現在凄まじい速度で発展しています。でも、発展してから環境対策を講じるのではなく、もっと早い段階で工業発展と環境保護を両立させるという方針が必要ではないかと思っています。近年、中国ではさかんに環境・資源の救出プロジェクトが発足しています。すなわち、急速な社会の発展に伴って、失われつつある我々の生活環境の保護は、中国にとって緊急の課題なのです。今までに日中デザイン交流の一環として、「環境保全を提唱する」と題した二つの展覧会が行なわれました。心を静めて日中の画家の作品を見ると、きれいな山の空気、葉の歌、清らかな泉の瀟洒な景色がありありと、想像できました。中国の都会の喧騒と、汚れた空気と比較して見ると、この絵のように美しい景色のある日本にいたことが、とても感動的でした。

日本の印象については、ここまで述べてきたこと以外に、日本人の真面目さ、勤勉さ、礼儀正しさ、またその反面、性格が頑固であるなどなど、この一年間で感じたことは言い切れないほどあります。しかし、まだ知らないこともたくさんあります。これからの留学研究生生活の中で、新しい印象が増えていくにつれ、既存の印象が変わってしまうかもしれません。ただしかし私の日本という国への理解はきっとどんどん深められていくに違いありません。

王 曉暉 (奨学生) 中国 (遼寧省)
千葉大学 教育学研究科 英語教育専攻

日本に来て一番感動したこと



ぎしぎし鳴っているが、ここのぼろぼろの椅子に座って、アイスクリームを食べる時間はバイト終わりの一番幸せな時間だ。見回していくと、高洲ショッピングセンターは豪華ではないが、私を暖かくさせる所だ。ゲートがずっと開いているから、外の緑が見える。空も。広い通路の片隅に私が座っている椅子がある。そして、通路の天井には私が視線を離したくないスピーカーが吊ってある。

春のある日、バイトが終わった後、いつものように、アイスクリームを買って、私の椅子に座った。急に、目の前をツバメが掠めて飛んでいった。同時にツバメの賑やかな鳴き声を耳にした。ツバメママはお客さんがぞろぞろ歩い

ている上のスピーカーに巣を作ってしまった！えっー！危ないだろう？！私はくちばしを開けて、お母さんを待っている四羽のツバメを思わず心配した。「ここで大丈夫なの？邪魔だから巣を取り外されるかもしれないよ！ツバメママはどうしてこんな所を選んだの！」私はアイスクリームを食べながら、ため息をついた。通っているお客さんは皆好奇の目を向けて、「可愛い！」と言った。私はこっそりまわりのお店の店員を見た。皆は何事もなかったように仕事をしていた。

翌日、バイトをしながら、可能な限りの場면을想像した。後で行った時は菓はもうなくなっているかしら。あるいは腕白な子供が菓に石を投げているかしら。あるいは店員が皆で箸でつついているかしら。バイトの時間が長くなったみたいに感じた。終わった途端に、私はどきどきしながらそこに走って、目を瞑ったままセンターに入った。祈りながら、目を開けて、スピーカーの所を見た。「あ！まだいる！良かった！」それとともに、その真下にダンボールが置かれていることに気付いた。それでツバメの糞便を受けていたのだ。まわりのお店の店員は

前日と一緒に、忙しく仕事をしていた。客は丁寧にダンボールを回って歩いて、前日と一緒に、「可愛い！」と言った。心の底から揺り動かされるような感動を味わった。

私も前日と一緒に、ぼろぼろの椅子に座って、アイスクリームを食べながら、この美しい調和を楽しんでいた。幸せなツバメちゃん！「余計な心配だな。」私は自分のことをあざ笑った。ツバママは最初から何でも知っていたのでしょう。もしかして彼女もここで生まれたのかもしれないね。青空を見て、私は微笑んだ。

金 鉉必 (奨学生) 韓国 (ソウル特別市)

千葉大学 工学研究科 人工システム科学専攻

日本に来て一番感動したこと

私が留学生として日本で生活するようになってから、小さな感動は日々ありますが、その中でも日本に来て一番感動したことは、日本人の親切さです。私は日本に来る前に日本での生活を考えると「外国人には冷たいのではないか」、言葉が通じないせいで「困っても誰も助けてくれないのではないか」と心配があり、いざ日本で生活する事を考えると、とても不安でした。そんな不安を自信に変えてくれ、同時にとても感動した出来事が、留学する前の2006年10月に旅行で日本を訪れた時に経験した、日本人の親切さと勇気でした。

私は原宿駅から船橋まで行こうと駅の路線図を見て、乗り換え方法を調べようとしてみましたが、初めて来た東京の複雑な路線で乗り換え方法が難しく、この時はまだ日本語も話せなかった為に、誰にも尋ねる事もできず、何分もただ路線図を眺めるだけでどうすることも出来ず困っていました。そんな時に背中をたたかれ、振り返ると女性の方がメモ帳に文字を書き、何か伝えてくれたのですが、その時の私は日本語が読めなかったため、簡単な英語で自分は韓国人だということ、船橋まで行きたい事を伝えました。するとその人も英語や図で目的地までの行き方を親切に教えてくれました。それでも不安だった私の気持ちをわかってくれたのか、「東京駅は乗り換え場所が複雑だから一緒に行きましょう」という内容をメモに書いて一緒に来て



くれたのです。東京駅まで行く途中で知ったのですが、彼女は横浜に住んでいて、自分が帰る方向とは全然違うのに私が乗り換える駅まで一緒に来てくれて、案内してくれたのです。そして、私が外国人だからメモで会話をしたのはなく、実は彼女は耳が不自由で、声を聞くことも話すこともできない為でした。日本には外国人にもこんなに親切にしてくれる人がいるという事、耳が聞こえない生活は困難なはずで、自分がもっと大変なのに、他人が困っている様子を見て、親切に助けてくれようとした心や、聞くことも話すこともできず会話ができないのに、メモを使って私の話を聞いてくれようとした勇気に、私は深く感動して、こんなに素晴らしい人がいる日本でなら、困難があってもきっとやっていけるのではないかと勇気もらい、自信を持つことができ、留学を決心しました。

今でも後悔している事は、あの方に簡単にしかお礼を伝えられなかった事と、もう会うこともできないため恩返しもできない事です。今になってあの方には何もできないけれど、あの方の気持ちや勇気を私が受けついだ困っている人や、助けを必要としている人の為に今度は私が手助けしたいと思っています。

みなさん、住所が変わっていませんか？

『OSF 便り』を送っても、「宛先不明」で返ってきてしまうことが多くなってきました。引っ越しをしたら財団へも必ずご連絡ください。近況報告も一緒に下さると、なお嬉しいです。ホームページから『OSF 便り』をご覧のみなさん。財団ではOBの皆さん全員に(海外にも)年6回便りを送っています。届いていない方、お知らせください。

みなさんといつまでも連絡をとり続けていきたいと思っています。

トピックスTopics!

年賀状ありがとうございました

今年も国内外からたくさんお年賀状をいただいた。
ありがとうございました。
可愛い子供の写真も増えた。みんな元気で頑張っている様子が感じとれて何よりうれしいことだ。

ジョセフ君 (H18 会館生、
ミャンマー) に2世誕生。
健やかな成長を祈っている。
おめでとう!



新年会

1月13日に奨学生、19日に会館生の新年会を行った。
鍋を囲み、暖かい一夜を過ごした。
豪華? 商品の当たる福引もあった。
気に入ったものがゲットできたかな?
今年も厳しい年になりそうだが、
明るく仲良く前向きにがんばっていこう!



会館委員長決まる!

会館で委員長選出の選挙があり、プーペー君(ラオス、千葉大)が第21代目の委員長に就任した。
これから一年よろしくお祈りします。

OB 来訪

お正月に周豪慎さん(H4 奨学生、中国)夫妻が会長宅へ年始のご挨拶に来てくれた。今、産業技術総合研究所に籍を置き、東大の特任教授も兼任している。電気自動車などに期待されている新しい電池の研究に取り組んでいるそうだ。世界の未来のためにがんばってほしい。

1月14日、張瀟さん(H19 奨学生、中国)が来団。昨年入籍したとの報告を受けた。

おめでとう!

2月11日、王維琦さん(H17 会館生、中国)が来団。仕事の打ち合わせでしばらく滞在するそうで、相変わらず活動的だ。

2月15日、王浩洋さん(H11 奨学生、中国)の奥さんとお子さんが来団。浩洋さんも中国で元気に活躍のようだ。



張瀟さん



周豪慎さん夫妻

会館生チェジュ島へ

2/20~2/22、会館恒例の旅行。今年は韓国の済州島だ。総勢9名、たくさんの楽しい思い出ができたようだ。



佐野先生(財団役員、日本語教室の先生)が1月19日~2月17日の1ヶ月間、日本語教室事情を視察するためにインドネシアに旅行に行かれた。有意義な土産話をお聞かせいただけるだろう。